

中国近世儒教

私が担当するのは「中国近世儒教」である。前が渡邊義浩氏の「中国古代儒教」、後が中島隆博氏の「中国現代儒教」となっている。通常の時代区分では古代と近世の間には中世が、近世と現代の間には近代が設けられるけれども、ここではそうなっていない。その主たる理由はいわゆる中世・近代が儒教の衰微期であったこと、より正確に表現すれば衰微期だとみなされていて儒教自体を対象とする研究蓄積がさほど大きくないこと、にある^{二〇}。ここでは近年日本で刊行された単著を対象を絞って動向を紹介し、中国近世儒教研究の現状と課題を考えてみたい。

新著『科挙と性理学——明代思想史新探』（研文出版、二〇一六年）のなかで、三浦秀一氏は佐野公治氏が五〇年前に提示した仮説を紹介している。以下、その孫引き。

（宋明の学者は）個人道徳と政治との連続を前提にして、政治・社会的問題の窮極的解決方法を、性理学の範疇内で追及した。……政治的社会的諸条件の変化による新しい事態の発生にも、「性理」学的理論の発展・展開というかたちで対応しよう

小島 毅

とする。だが「性理」学の発展が、完結するならば、新しい社会状態を思想の側から克服しようとするときには、すでに性理学の範疇では不可能である。こうして清初においては陽明学の成果が継承される一方、より治国平天下の実際の方策に関心が向いたのではない^{二一}か。

三浦氏の行論はこのあと、筆者（小島）の見解を紹介したりしたうえで、「佐野氏の提言に拠るとしたい。……性理学に重きを置く視点に固執したのである」と結ばれる（上述書、三二頁）。そして、本論では『性理大全書』の書誌学的考察に始まり「提学官王宗沐の思想活動」に終わる七つの章にわたって、明代の科挙制度と性理学との関係が思想的側面から論じられる。佐野氏が「仮説を提示」（三浦氏の表現）してから五〇年、三浦氏によってあらためて問題提起されたこの「視点」こそ、日本における近世儒教研究の近況を概観するに好適と考え、その枠組みを借りて本報告を進めていきたい。

三浦氏の前著は『中国心学の稜線——元朝の知識人と儒道仏三

教』と題されていた(研文出版、二〇〇三年)。筆者はその書評のなかで心学・稜線という語に懐疑的な記述をしたことがある^④。その意図は、三浦氏が新著で批評してくださっているとおり、「礼治システム」論の視角から従来の心性論偏重の研究史に異議申し立てをするにあつた。三浦氏前著が、従来は看過されてきた元代を扱ったという重要な意義を評価しつつも、「心学」中心・「稜線」主義に見えたからである。その幾分かは筆者の誤読・曲解によっていたかもしれない。ただ、三浦氏が心学・性理学として整理していくこの視点は、「黄宗義が「理学」に特権を与えたその直観と、本邦におけるこの研究分野への功績とに敬意を表するとともに、それらの豊穡な成果を受け継いで後世に伝える」(新著の三一頁)と語っているとおり、まさに黄宗義『明儒学案』が作り上げたものであつた。

筆者もまた「その直観と、本邦におけるこの研究分野への功績とに敬意を表する」者である。そのうえで宋明理学の全貌に迫るには、「それらの豊穡な成果を受け継いで後世に伝える」とともに、従来の研究が看過してきたところを補う必要があると考へていく。この点で、三浦氏と筆者とは、認識を共有しながらも別の方途を歩んできたと言えそうである。三浦氏の新著が「応用科挙史学研究会」を「揺籃の地」(三浦書、三三三頁)とし、同会のメンバーである鶴成久章氏の研究などととも、利用可能となった各種史料を活用して、明代士大夫たちが科挙制度のなかで精神活動を営んでいた様相を明らかにしていることを特記しておきたい。

科挙との関係に注目するこの傾向とある意味で対応するものとして、永富青地氏の『王守仁著作の文献学的研究』(汲古書院、二〇〇七年)は、陽明学の展開を王守仁の著書の制作・流布という面か

ら分析した労作である。テキストの読解を通して思想言説の内側から分析するのではなく、テキストの生成過程といういわば外側から当該思想言説の特徴を明らかにする見事な手法で、これまでの陽明学研究に新風を吹き込んだ。ただ、考えてみれば、後述する清朝考証学研究などではその対象となる考証学者たちについてこの作業から研究を始めるのが常道である。陽明学については、もしそれがいくぶん疎かにされてきたとすれば、それは心学研究の作法が考証学的ではなく「心学的」だったことに起因するのではなからうか。

考えてみれば、一人の人間の思想を研究する際、その人の残したすべての言葉・すべての文章を収集することは不可欠の基礎作業である。それさえなされていない今、われわれの王陽明思想の研究はまだまだ不完全なものなのであり、今後、完全な全集にもとづいて、より高度な研究を進められる日のために、佚文収集の努力をつづける必要があると思われるのである^⑤。

次に目を宋代に向けてみよう。二一世紀にはいつてから刊行された単著として、土田健次郎『道学の形成』(創文社、二〇〇二年)、市来津由彦『朱熹門人集団形成の研究』(創文社、二〇〇二年)、吾妻重二『朱子学の新研究——近世士大夫の思想史的地平』(創文社、二〇〇四年)、同じく『宋代思想の研究——儒教・道教・仏教をめぐる考察』(関西大学東西学術研究所、二〇〇九年)、垣内景子『「心」と「理」をめぐる朱熹思想構造の研究』(汲古書院、二〇〇五年)、小路口聡『「即今自立」の哲学——陸九淵心学再考』(研文出版、二〇〇六年)、そして、二〇一四年に逝去した

木下鉄矢氏による朱熹についての一連の著作群^(A)が陸續と出版された。それぞれに視点は異なるが、傾向として道学・心学の形成過程への注目があげられよう。

従来、朱熹自身の語りに従って道学の開祖を周敦頤^(B)とし、周程授受によって興隆したとする見方が定説であった。周敦頤およびその『太極図説』の位置づけについては朱熹在世時から陸九淵との論争があり、黄宗羲が朱陸の二流派を宋明理学の二本柱に立てる所以ともなっていたわけだが、土田氏はあらためて周程授受に対する批判的検証を行い、その思想的な意味を指摘する。そして、程頤に大きな影響を与えた師として胡瑗の存在を確認している。宋学創始者としての胡瑗（および孫復・石介）の顕彰は歐陽脩に始まって『宋元学案』の章立てでもまたそうなっており、「周張二程」という朱子学視点での語りを相対化して当時の実態から宋学形成史を再構成する試みは、「朱子学とは何だったのか」という大きな課題に取り組むうえで必須の作業と思われる。その際には、王安石や蘇軾および彼らの後学を対象とする研究による、道学との比較作業も有効であろう。つまり、ここでも黄宗羲が作りあげた図式の再検討というところである。

儒教の思想家は、同時に士大夫（科挙に合格していない士人を含む広義の意味）であった。緒方賢一『中国近世士大夫の日常倫理』（中国文庫、二〇一四年）は、儒学を担った人たちが暮らしていた生活空間の視点から思想的な教説に光を当てている。一九八〇年代以降米国で隆盛したローカルエリート（local elite）と地域社会論を承けて、家訓・勸善書・『孝経』などを対象に考察を行っている。

田中秀樹『朱子学の時代——治者のく主体へ形成の思想』（京都大

学学術出版会、二〇一五年）は、前半で朱熹の君主論・政治論と會点評価問題、後半では江戸儒学の陸贄評価を扱う。唐代の士大夫たる陸贄が理想的な治者として称揚されるのは朱子学の政治理念と結びついていることであり、そうした評価が定着していたのが「朱子学の時代」ということであろう。

北宋を代表・象徴する士大夫といえは蘇軾に勝る者はいない。しかし、従来は文学史や美術史で、あるいは党争の渦中にあつた人物として政治史において、彼に対する研究が多くなされてきたものの、儒者としての面を扱う研究は多くなかった。ところが、近年、彼の易学を扱った塘耕次『蘇東坡と『易』注』（汲古書院、二〇一三年）と、蘇軾をはじめとする宋代尚書学全般を扱った青木洋二『宋代における『尚書』解釈の基礎的研究』（明徳出版社、二〇一四年）が相次いで刊行された。宋学の一翼を担った思想家としての蘇軾研究が進み、朱熹が作り上げて黄宗羲が定着させた道学中心史観を実証的に崩しつつある。土田氏や吾妻氏、そして井澤耕一^(C)氏らによる王安石および彼の学派の研究もあり、『宋元学案』のように彼らを「学略」として傍流扱いする見方は宋代思想史の実相とは異なることが白日の下に晒された^(D)。

蘇軾・王安石は、経学者として漢唐訓詁学とは異なる内容の経書解釈を行い、独自の思想的教説を説いて門下生を養成した。特に王安石の場合、国家権力を用いて自身の教説を広めたという特徴がある。士大夫たちの多くは所謂思想家ではなく、科挙試験に合格して官僚となることを目的に経書を学んでいた。経学的重要性は宋代になつても些かも減じていない。従来、ともすると「中国哲学」の名称・枠組みに左右されて、哲学的な分析対象が研究されてきたさら

いがあったけれども、近年は上に紹介した諸研究の書名からも窺えるように、宋代経学に対する正当な評価が進められている。佐藤仁『宋代の春秋学——宋代士大夫の思考世界』（研文出版、二〇〇七年）は、後半はより広く思想関係の論文を収録するものの、前半で宋初三先生のひとり孫復^{二二}の『春秋尊王發微』や、劉敞の『七経小伝』における春秋学の特質を分析している。

ここに将来の課題として浮上してくるのが、その前の時代、すなわち漢唐訓詁学との関係である。両者の性格が大きく異なるためか、研究者の間でも一種の分業体制が敷かれてきた。たとえば、野間文史氏の『十三経注疏の研究——その語法と伝承の形』（研文出版、二〇〇五年）や『五経正義研究論考——義疏学から五経正義へ』（研文出版、二〇一三年）は、対象を禁欲的に漢唐訓詁学（およびその後代の受容）に限っている。また、南北朝時代に興った義疏学についても、近年は専著がいくつ出版された。高橋均『論語義疏の研究』（創文社、二〇一三年）は書名通り、皇侃の義疏について敦煌本を中心に文献学的に分析したもの。古勝隆一『中国中古の学術』（研文出版、二〇〇六年）も皇侃の義疏にいたる学術の展開を辿ったものだし、橋本秀美氏は喬秀岩の筆名で『義疏学衰亡史論』（白峰社、二〇〇一年）を著して従来とは異なる義疏像を提示している。一般書だが、つい最近、影山輝国氏の『論語』と孔子の生涯』（中央公論新社、二〇一六年）が上梓され、皇侃の義疏による『論語』解釈が多く紹介されている。ただ、こうした義疏学が宋初の十三経注疏を経て、どのように宋代の経学に接続していくのか、旧来はその断絶面ばかりが強調されてきたし、上述のように両者にまたがる研究を個人でなすことが稀有な状況だったこともあつ

て、問題は依然として残されている^{二三}。

最後に、近世後半に位置する清朝の学術に簡単に触れておこう。まずは、伊東貴之『思想としての中国近世』（東京大学出版会、二〇〇五年）から。本書では、儒教研究で清といえは清朝考証学という見方とも、明末以来の陽明学や経世致用の学からの挫折や屈折を論じる見方とも異なる視点に立ち、清代にも依然として思想界の主流であった朱子学^{二四}を前面に据えて、中国における近世の意義を思想的に探究している。

正統的な考証学研究としては、吉田純『清朝考証学の群像』（創文社、二〇〇六年）がある。考証学者たち個々に一章ずつを与える学案型の構成を取ってその群像を描くことで、朱子学や陽明学のようには一概に説明しにくい考証学の姿を多面的に見せる内容となっている。

イエズス会宣教師たちの来華が与えた文化的影響は甚大だった。この方面からの研究を四冊紹介する。ひとつは岡本さえ『近世中国の比較思想——異文化との邂逅』（東京大学出版会、二〇〇〇年）で、「文人の西学観」・「思想の伝播」・「華夷の逆転」という三部構成によってこの時期（明末を含む）の思想動向を解説していく。石井剛『戴震と中国近代哲学——漢学から哲学へ』（知泉書館、二〇一四年）は、考証学を代表する学者とされてきた戴震を俎上に載せ、近代における彼への評価から説き起こしたあと、戴震自身の言説分析へと向かい、それが中国近代哲学の成立にいかにつなげていったか考察するという構成を取る。西学受容者戴震がなぜ哲学的言説の源流となるのか。石井氏はいくつにも分岐する問題群を整理しながら自説を開陳している^{二五}。

あとのふたつは儒教を扱った研究というより、儒教に影響されて誕生した思想を扱う内容である。堀池信夫『中国イスラーム哲学の形成——王岱輿研究』（人文書院、二〇一三年）は、王岱輿の思想を中心に、一般に回儒と呼ばれるムスリムの学者たちについて広範に紹介している。不幸なことにイスラームは近年の国際情勢の中で政治的に脚光を浴びているが、学術的にその多様な展開を捉え、固定的で偏向したイメージの増幅・流布を防ぐことは、人文学に課せられた使命かもしれない。堀池氏らの研究が広く認知・参照されていくことが望まれる。

中国思想とイスラーム哲学の融合ばかりではない。そもそも、西洋近代哲学自体、キリスト教宣教師たちがもたらす中国情報に大きな影響を受けていた。井川義次『宋学の西遷——近代啓蒙への道』（人文書院、二〇〇九年）は、近代啓蒙思想の誕生が、従来から言われてきたより遙かに深く宋学の影響を蒙っていることを実証した。啓蒙思想や観念論哲学が宋学に多くを負っているのだとしたら、石井前掲書が扱っているような中国近代哲学の成立は、いわば先祖帰りということになる。石井・井川両氏の手法を効果的に結び付けることで、単なる中国近世儒学研究にとどまらず、西洋哲学史や近代哲学全般に及ぶ問題圏が浮かび上がってくる可能性がある。

以上、雑駁な簡介をおこなった。ここから窺える中国近世儒教の今後の研究展望として次のような方向性が考えられよう。

- 1 儒教の教説内容が、科挙制度やその担い手である士大夫の実生活とどう関わっていたかの実証的分析。
- 2 宋学形成の途上における漢唐訓詁学からの継承と変容の展開過

程。

3 西学伝来にともなう中国学術の変容が持つ世界史的意義。

《注》

(一) もうひとつ、「中世」が具体的にいつを意味するかという根本的問題がある。筆者が以下で扱う「近世」は、論者によっては「中世」である。だが、ここでは時代区分論争には深入りせず、文学・思想研究での通常の用法、「宋から清まで」を近世とみなす。

(二) 佐野公治「清初思想研究の現状と問題点」（『中京大教養論叢』七号、一九六六年）を三浦氏が前掲書二三頁に引用したものの。

(三) 小島毅『中国近世における礼の言説』（東京大学出版会、一九九六年）。

(四) 小島毅「書評 三浦秀一著 中国心学の稜線——元朝の知識人と儒道仏三教」（『集刊東洋学』九二号、二〇〇四年）。

(五) 最近の当該分野論文としては「明代安福の『春秋』学——挙業から見た学問的系譜」（『福岡教育大学国語科研究論集』五六号、二〇一五年）がある。

(六) 科挙と明清士大夫の心性について使った英語の専著として、ベンジャミン・A・ヘルマン氏 (Benjamin A. Elman) の *Civil Examinations and Meritocracy in Late Imperial China* (Harvard University Press, 2013) がある。同氏の旧著 *A Cultural History of Civil Examinations in Late Imperial China* (University of California Press, 2000) の続編と位置づけられることができる。

(七) 永富青地「思想家の言葉はどのようなようにして書籍に定着したのか——王陽明を一例として」（早坂俊廣編『文化都市 寧波』、

東アジア海域に漕ぎだす²、東京大学出版会、二〇一三年）、一一九頁。

(八) 一九九九年刊行の『朱熹再読——朱子学理解への一序説』（研文出版）、『朱子学の位置』（知泉書館、二〇〇七年）、『朱熹哲学の視軸——続朱熹再読』（研文出版、二〇〇九年）、『朱子——“はたらき”と“つとめ”の哲学』（岩波書店、二〇〇九年）、『朱子学』（講談社選書メチエ、二〇一三年）など。

(九) 周敦頤の「敦」字は本来「惇」であったが避諱で代用したものが定着した。吾妻氏は周惇頤と表記しており、筆者もそれが正しいと考えるが、本稿ではとりあえず慣例に遵っておく。

(一〇) 井澤氏にまだ単著はないのだが、「王安石『詩義』に関する一考察——朱熹『詩』解釈との関わりにおいて」（『詩経研究』二九号、二〇〇四年）や『毛詩正義』と王安石『詩義』——唐から北宋までの経義解釈の展開」（『詩経研究』三二号、二〇〇七年）を発表している。

(一一) なお、小島にも「天を觀て民に示す——王安石学派易学初探」（伊原弘編『清明上河図』と徽宗の時代——そして輝きの残照』（勉誠出版、二〇一一年）、「王安石から朱熹へ——宋代礼学の展開」（小島康敬編『礼楽』文化）、ぺりかん社、二〇一三年）、「宋代における経学と政治——王安石と朱熹の異同」（小南一郎編『学問のかたち——もう一つの中国思想史』、汲古書院、二〇一四年）、「龔原『周易新講義』について」（『東方学』一二九輯、二〇一五年）など、王安石学派研究の論文がある。

(一二) あとのふたりは、胡瑗と石介。これは欧陽脩に始まり、朱熹らの認証を経て、『宋元学案』で確立する時代認識であった。たしかに彼らは宋学の創業世代だが、彼らが活躍した一一世紀

なかばには、宋という王朝は建国以来すでに八〇年を経ていた。これに先立つ『十三経注疏』の作成は、王朝断代史的には宋代の出来事である。

(一三) 以上が、筆者の時代区分での「中世から近世へ」の接続である。

(一四) 清代にも朱子学が主流だったとする見解には少なからぬ異論が予想される。だが、科挙受験という場で儒教の思想教説と接するふつうの士大夫たちは、朱熹やその末流の解釈で経書を学んでいた。学術的・思想的には所謂考証学の方が価値のあること、そこに西洋伝来の知識が大きく作用していることには私も異存無いが、多数派はいかかわらず朱子学であったことを見落としてはなるまい。なお、考証学の社会性・文化性を論じた前掲エルマン氏の処女作がいに日本語で読めるようになったことを特記しておく。馬淵昌也・林文孝・本間次彦・吉田純諸氏共訳による『哲学から文献学へ——後期帝政中国における社会と知の変動』（知泉書館、二〇一四年）で、英語版初版は一九八四年、中国語版は一九九五年に刊行されている。

(一五) また、安大玉『明末西洋科学東伝史——『天学初函』器編の研究』（知泉書館、二〇〇七年）は、内容的に儒教史というよりも科学史の範疇に入れられることになろうが、西学が中国の科学思想に与えた影響を論じている。

(一六) 回儒については青木隆氏・佐藤実氏らによる「回儒の著作研究会」もあり、その一員である中西竜也氏が『中華と対話するイスラーム——一七〜一九世紀中国ムスリムの思想的営為』（京都大学学術出版会、二〇一三年）を上梓し、サントリー学芸賞を受賞している。